

昭和4年に開催された巴里日本美術展覧会について

永田 真岐子(大手前大学大学院)

昭和4年(1929)6月にパリのジュー・ド・ポム国立ギャラリーにおいて「巴里日本美術展覧会」が開催された。それは両国の国家的事業として計画され、わが国では文部省や外務省、大使館といった政府機関が実行にあたった。展示内容は日本画と工芸に限られ、当時の若手の作品が対象となった。日本画に関しては、帝国美術院や日本美術院を中心に、東西の精鋭が集結する結果となった。展覧会の目的は、両国の文化交流を促進し、また、これまで江戸絵画に関心を寄せてきたヨーロッパのコレクターに向けて、近代の日本画を紹介し美術市場の活発化を図るものだった。この展覧会は盛況のうちに閉幕し、オランダなどにも巡回している。

さらに同年12月には展覧会報告書「巴里日本美術展覧会報告」が刊行され、関係者や出展した画家に配布された。これによると、この展覧会がヨーロッパの美術評論家たちの間で大きく取り上げられ、大正期の日本画が高い評価を得たことが伺え、これがその後のヨーロッパの美術市場における日本美術の需要拡大につながったと思われる。その反面、この展覧会の成果は日本国内の美術批評に積極的に取り上げられることはなく、展覧会の存在自体もほとんど知られないまま今日に至った。

これまで大正期にヨーロッパで開催された近代日本美術展として知られてきたのは、昭和5年(1930)にローマで開催された「羅馬日本美術展覧会」であり、大倉財団の所蔵するコレクションや当時の資料を中心として研究が進められ、また関連する展覧会も行われてきた。これに対し、その一年前に開催された「巴里日本美術展覧会」は、これまで近代日本美術史研究の中に取り上げられることがなく、美術史年表等においても記載も無いものがあり、もちろん展覧会の意義に関する議論も行われていないのが現状である。発表者は、これまで行ってきた楠木清方の研究を進めるうちに、幸運にもおそらく今日に残る唯一の同展の報告書の残部に出会い、同展開催の経緯や展示の全貌を明らかにすることができた。これにより「巴里日本美術展覧会」を当時の日本画が国外で評価を受けた最も初期の美術展としてとらえ、その詳細を改めて見直し、近代日本美術史の中にどのように位置づけできるかを検討したい。

「巴里日本美術展覧会」が行われる以前の数年間、国内では海外を視野にいれた美術界の活動の一つとして、日仏交流の展覧会が東京において毎年のように開かれていたが、その事業には黒田清輝らの国民美術協会が関わり、わが国の洋画界を中心に始まったことが知られている。しかしその内容は次第に日本画を主体にしたものへと変わり、趣向も変化していったようである。また、展覧会前後に起こった美術運動の背景として日本美術の「伝統」についての議論との関係が重要である。ようやく大正時代後半に美術評論家らの間で用いられるようになった「伝統」の概念は、黒田重太郎の「伝統論」の発表などを嚆矢に、やがて洋画・日本画の両分野におよび、「日本美術」とは何かという問題にまで発展していった。しかし大正末年にはこの議論が帰結しないまま、明快なアイデンティティーをもたない「日本美術」が海外へと紹介され、日本の洋画は「近代的」、伝統に立脚する近代の日本画は「古典派」として認識されたようである。世界における「日本近代美術」の認識、それと並んで国内の「日本美術」をめぐる議論が、どのように帰結していくのかを慎重に見極めることが重要であり、その上に立つことで「巴里日本美術展覧会」の意義も自ずと明らかになると思われる。